

## ② 実演芸術連携フォーラム

### 事業趣旨

「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（通称「劇場法」）が平成24（2012）年6月に施行されたことを受け、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕は、文化庁との共催により、平成25（2013）年より「全国劇場・音楽堂等連携フォーラム」を継続して開催してきました。芸術団体、劇場・音楽堂等との相互連携の促進を目的としたこのフォーラムでは、平成26（2014）年1月の第2回フォーラムにおいて、劇場・音楽堂等と芸術団体は「実演芸術・地域文化をより豊かなものとする」ことを共通目的として、連携を深めていくことを宣言しました。

このフォーラムを、相互連携のあり様や、実演芸術分野における専門人材についての議論の場として発展、深化させるべく、平成27（2015）年度より、実演芸術連携交流事業の取組の一つに位置付けて実施しています。

さらに、劇場・音楽堂等、芸術団体に限らず、実演芸術分野に多様な形で携わる人たちとの情報共有の場として広げるべく、平成29（2017）年度には名称を「実演芸術連携フォーラム」と改めました。

### 実施概要

平成30（2018）年度より、それまで東京のみの開催だったところ、地域課題の抽出と共有を目指して、東京以外での地域版も実施することとしました。そこで、第8回実演芸術連携フォーラムを7月に東京で、第9回実演芸術連携フォーラムを10月に兵庫で、それぞれ実施しました。

#### 第8回実演芸術連携フォーラム

「〇〇を実現するためには、だれと連携することが必要でしょうか」というキャッチコピーのもと、実演芸術分野の専門性を発揮しながら、誰と、どんな形の連携が必要かをテーマに実施しました。

基調講演は、本事業の主催である文化庁・藤原章夫 文化部長より、現在の劇場・音楽堂等を取り巻く環境、組織改編が行われる新・文化庁の展望をお話しました。

第1部は、「人材交流から描く未来図」と題し、国内専門家フェロシップ制度の対象となり、平成29（2017）年度に研修を実施した6名による研修報告を行いました。外部団体での実務研修によってもたらされた発見、効果等を共有しました。

第2部では、「新たな顧客創出にむけた取り組みの広がり」と題し、異分野との連携、劇場間ネットワークによるツアー公演の受け入れ、作品提供について、芸術団体、劇場、音楽堂による先進的な取組事例を紹介いただき、具体的な連携のあり方を考えました。

#### 第9回実演芸術連携フォーラム

「地域の人々との接点をつくりだすために、私たちはなにができるでしょうか」というキャッチコピーのもと、芸術団体、劇場・音楽堂等が地域においてどんな役割を担いうるのか、多様な事例の共有と意見交換を行いました。

第1部は第8回と同様に、「人材交流から描く未来図」と題し、国内専門家フェロシップ制度の対象となり、平成29（2017）年度に研修を実施した2名による研修報告を行いました。

第2部は、「市民と芸術をつなぐ担い手として～劇場とアーティストの協働の事例から」をテーマに、鑑賞にとどまらない活動の事例を共有し、実演芸術分野の専門性を活かした地域課題との向き合い方を考えました。

いずれも広報として、チラシ作成および配布、郵送およびメール・FAXによる案内発送、本事業および芸団協のウェブサイトでの告知、Facebook等SNSでの情報発信を行いました。また、開催にあたり協力名義をいただいた団体にも告知協力を仰ぎ、全地域に対して広く周知を図りました。

結果として、第8回は130名、第9回は61名の参加がありました。各回とも、公立・民間の劇場・音楽堂等、芸術団体、文化政策等の研究者、自治体の文化行政担当者、文化振興の関連機関等、全国から多様な立場の人々が集い、情報交流する機会となりました。

### 第8回実演芸術連携フォーラム

【日 程】2018年7月10日（火）13：00～18：00

【会 場】国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟101室（渋谷区代々木神園町3-1）

【参加費】無料

【時間割・パネリスト】

13:00～13:30 基調講演 藤原章夫（文化庁文化部長）

13:30～15:30 第1部「人材交流から描く未来図～国内専門家フェロシップ研修報告から」

佐々木 真美（島根県芸術文化センター グラントワ いわみ芸術劇場）

樋口 寿弥（知多市勤労文化会館）

小川 恵祐（南城市文化センター シュガーホール）

五田 詩朗（NPO 法人こどものみかた）

高橋 郁乃（アーツカウンシル新潟プログラムオフィサー）

石川 絵理（NPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク）

進行：楫屋 一之（神奈川県国際文化観光局舞台芸術担当部長 兼 青少年センター参事）

15:45～18:00 第2部「新たな顧客創出にむけた取り組みの広がり」

山岸 淳子（公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団）

矢作 勝義（穂の国とよはし芸術劇場PLAT）

伊藤 文一（KAAT 神奈川芸術劇場）

進行：岸 正人（（仮称）豊島区新ホール劇場開設準備室）

※（ ）内の所属は2018年7月時点のものです

【手話通訳】東京手話通訳等派遣センター／小川加代子（石川氏の発表の読取通訳）

【協 力】公益社団法人全国公立文化施設協会／劇場、音楽堂等連絡協議会／公共劇場舞台技術者連絡会

【写真撮影】中村佳代子

## 基調講演

藤原 章夫  
(文化庁文化部長)



基調講演では、昨今の文化政策の動向、そして今後の展望について、文化庁・藤原文化部長にお話しいただきました。

### 文化芸術をめぐる状況

今日、非常に大きな転換期に差しかかりつつあると認識しています。色々な形で文化が語られますが、経済的側面からの文化芸術の役割が求められていることが、一つの大きな要因でしょう。近年、国を挙げて観光振興を進める中で、文化芸術を充実させることで経済的価値の創出につながるという流れがあります。

しかし、文化芸術には、経済的側面だけではなく、デジタル化が難しい部分があります。これをふまえて、人々に感動を与えるという芸術の本質的な価値を大切にしながら、総合的な文化政策が求められているのではないかと思います。

### 文化芸術基本法の改正について

2001年に「文化芸術振興基本法<sup>1)</sup>」が施行され、17年目での初の改正によって、2017年に「文化芸術基本法」として新たなスタートを切りました。基本理念に新たに加えられた次の三つは、とくに大きなポイントでしょう。

- ▶ 年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく文化芸術を鑑賞し、これに参加し、又はこれを創造することができるような環境の整備が図られなければならない
- ▶ 芸術文化に関する施策の推進に当たっては、乳幼児、児童、生徒に対する文化芸術に関する教育の重要性に鑑み、学校等、文化芸術活動を行う団体、過程及び地域における活動の相互の連携が図られるよう配慮されなければならない
- ▶ 文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を、文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮しなければならない

文化芸術は、様々な付随的価値を生み出すもの。それらの価値を文化芸術の継承、創造、発展の循環サイクルに活かすためにも、異分野との連携を含めてより総合的な文化施策の推進を行うことが必要だと明記されたのです。また、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会においても重要なコンセプトになっている共生社会の実現においても、文化芸術が果たしうる役割を見い出していくことが求められます。芸術教育についても、組織改編により、2018年10月から文部科学省初等中等教育局で行なっている芸術教育に関する部分が文化庁に移管されます。これを機に、文化庁、文化関係団体、学校現場との連携も一層進めてい

きたいと思います。

さらに法改正で重要なもう一点は、文化芸術推進基本計画<sup>2)</sup>の策定です。2018年3月に、国の基本計画を策定し閣議決定をしましたが、地方公共団体においても地方文化芸術推進基本計画の策定に向けた努力義務が明記されています。各地域において何が重要か、しっかり議論していくことが文化政策の持続的な発展につながると考えます。

### 文化芸術推進基本計画 今後の文化芸術の目指すべき姿

国の文化芸術推進基本計画は、今後の文化芸術政策の目指すべき姿や、今後5年間（2018～2022年度）の文化芸術政策の基本的な方向性を示したものです。文化芸術基本法の性質をふまえ、観光等の関連施策を取り込みながら、文化芸術の持つ価値を総合的に推進していこうという考えが柱になっています。

検討の過程では、府省庁の文化芸術関連施策についても、文化芸術推進会議（府省庁の局長級を招集した会議）での調整を経て盛り込んでいます。また、文化芸術団体等からも委員を招集したワーキンググループや、ヒアリングを実施するなど、現場の意見を幅広く集めながら審議してきました。

そうしてまとめられた文化芸術推進基本計画には、文化芸術の創造、発展、継承、教育の大きく四つの目標と、六つの戦略が書かれています。

- 戦略1 文化芸術の創造・発展・継承と豊かな文化芸術教育の充実
- 戦略2 文化芸術に対する効果的な投資とイノベーションの実現
- 戦略3 国際文化交流・協力の推進と文化芸術を通じた相互理解・国家ブランディングへの貢献
- 戦略4 多様な価値観の形成と包摂的環境の推進による社会的価値の醸成
- 戦略5 多様で高い能力を有する専門的人材の確保・育成
- 戦略6 地域の連携・協働を推進するプラットフォームの形成

日本ほど、伝統芸能からポップカルチャーまで、非常に豊かな文化芸術の歴史的な厚みをもつ国はないでしょう。この豊かさを、文化庁だけでなく外務省や経済産業省、観光庁等の関係省庁と連携を図りながら、政府全体で進めて行いべきと謳っています。

また、劇場等や芸術団体の活動が、どのように社会に還元していけるのか、地域課題の解決に向けて取り組んでいけるのかという観点が求められています。例えば、孤立、引きこもり、不登校、在日外国人の増加等、地域コミュニティの中で文化芸術活動を通してどんな効果を生み出すことができるのか、注目されているのです。そうした社会的価値をどのように可視化していけるのかも、取り組んでいきたいところです。

### 劇場・音楽堂等をめぐる現状と課題

文化芸術基本法の改正、文化芸術推進基本計画の策定を経た今日、真に地域の拠点施設としての役割とは何か、あらためて考える必要があるのではないのでしょうか。平成24（2012）年に施行された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律<sup>3)</sup>」の中で、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能が、劇場・音楽堂等に期待されていることが書かれています。その上で、地域における役割をあらためて認識し、取組を広げていくことが重要ではないのでしょうか。

文化庁が捉えている課題として、次の四つを挙げます。

1) 「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律」が、平成29（2017）年6月23日に公布、施行。改正に、法律の名称を「文化芸術基本法」とすることも含まれる。[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/kihon/geijutsu\\_shinko/index.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/kihon/geijutsu_shinko/index.html)

2) 「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律」が、平成29（2017）年6月23日に公布、施行。改正に、法律の名称を「文化芸術基本法」とすることも含まれる。[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/kihon/geijutsu\\_shinko/index.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/kihon/geijutsu_shinko/index.html)

3) 「文化芸術推進基本計画—文化芸術の『多様な価値』を活かして、未来をつくる—」（第1期）は平成30（2018）年3月6日に閣議決定された。[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/hoshin/index.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/hoshin/index.html)

- 劇場、音楽堂等としての機能が十分に発揮されていないこと
- 地方では相対的に多彩な実演芸術に触れる機会が少ないこと
- 指定管理者制度、専門人材の養成と確保といった管理体制の問題
- 課題解決に向けた活動の成果目標が不明確であること

財務省の調査では、文化庁による補助金等の文化芸術活動に対する支援について、各活動における目標と達成プロセスが必ずしも明確でないということを厳しく指摘されています。できる限り、劇場・音楽堂等における活動の達成目標を明確に掲げて取り組んでいただき、PDCAサイクルにつなげていただきたいと思います。

その際に、入場者数という一元的な数値目標で成果を測るだけでなく、劇場・音楽堂等が持ちうる機能を幅広く捉え、それに即した目標を設定することが重要でしょう。

### 文化庁の京都移転

昨今の大きな話題の一つに、文化庁の京都移転があります。2021年度中に京都への全面的移転を予定しており、それに先立って2018年10月に組織改編を行い、新たな体制がスタートする予定です。全体の7割が京都へ移転し、残る3割が東京での国会対応、外交関係、関係省庁との連絡調整等に関わる政策の企画立案業務、諸団体対応等の業務を行う予定です。

組織改編によって、文化部長というポジションに代わり、文化庁審議官となります。現在は、文化部と、伝統的な文化を担当する文化財課とが分かれており、一体的な対応ができていないという指摘もあります。縦割りを見直し、長官のもとに次長、審議官を置くという新体制になります。

皆さんと関係が深いであろう実演芸術の多くを担当するのは、参事官（芸術文化担当）になるかと思えます。この組織は東京に残る予定です。引き続き、関係諸団体と連携を図りながら対応を行なっていければと考えています。

### 東京2020大会に向けた文化プログラム

最後に、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会の文化プログラムについて。オリンピック憲章には、単にスポーツの祭典ではなく、文化の祭典でもあると書かれています。とりわけ2012年のロンドン大会から、文化プログラムが大きな注目を浴びています。2020年東京大会を絶好の契機と捉えて、日本の文化芸術を最大限に盛り上げ、発信していくためにも、文化庁、東京都、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会らが連携、協力しながら文化プログラム全体を進めていくべきでしょう。

また、2018年はフランスで「ジャポニスム2018」が大規模に展開されます。これは国際交流基金が中心となって進めています。文化庁も様々な協力や支援をしています。2019に年は、アメリカと東南アジアで実施することも決まっています。



そして、2020年には日本で大規模な「日本博」を開催することが決まりました。これは、文化庁が中心になって進めていきます。

文化芸術が深く関連する催事が、いくつか並行して計画、実施されようとしています。いずれも、文化芸術団体、劇場・音楽堂等に携わる専門人材の皆様との協力なしには実現しえないでしょう。実演芸術連携フォーラムの機会を活用しながら、横断的なつながりをしっかりと構築し、皆様と一緒に大きな盛り上がりを作っていければと思います。

## 第1部 「人材交流から描く未来図」 ～国内専門家フェローシップ研修報告から～

第1部では、各地での文化事業の実施にも欠かせない実演芸術分野の専門的人材をテーマに取り上げました。文化施設、芸術団体という枠組や職域、地域を超えた人材交流を通して生み出される団体間のネットワークと、各地のキーパーソンとなる人材の創出は、全国での実演芸術振興の基盤となり得るものです。「国内専門家フェローシップ制度」の平成29（2017）年度対象者による研修報告から、人材交流がもたらす効果と可能性を考えました。

### 国内専門家フェローシップ制度 平成29（2017）年度対象者一覧

※（ ）内の所属および報告内容は、2018年7月時点に基づくものです。

氏名	専門職能	派遣元（所属）	研修受け入れ団体	研修期間
石川 絵理	アートマネジメント	NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク	ビッグ・アイ共働機構 国際障害者交流センター ビッグ・アイ	2017年10月5日～ 2017年12月3日
小川 恵祐	制作	南城市 シュガーホール	公益財団法人しまね文化振興財団 島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場	2017年11月22日～ 2018年1月17日
五田 詩朗	制作	NPO法人こどものみかた	公益財団法人川崎市文化財団 ミュゼ川崎シンフォニーホール	2017年10月18日～ 2018年1月31日
佐々木 真美	制作	公益財団法人しまね文化振興財団 島根県芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場	公益財団法人せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター	2018年1月20日～ 2018年2月28日
高橋 郁乃	アートマネジメント	公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンシル新潟	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団 ロームシアター京都	2017年10月1日～ 2018年2月28日
津内口 淑香	制作		公益財団法人神奈川芸術文化財団	2017年9月1日～ 2018年2月28日
樋口 寿弥	運営管理	アクティオ株式会社 知多市勤労文化会館	公益財団法人可児市文化芸術振興財団 可児市文化創造センター	2018年1月5日～ 2018年3月4日
目原 瞬	舞台技術	公益財団法人水戸市芸術振興財団 水戸芸術館	(公財)北九州市芸術文化振興財団 北九州芸術劇場	2017年12月14日～ 2018年2月12日

※目原氏は都合により報告会は欠席

佐々木 真美 | 公益財団法人しまね文化振興財団 文化事業課/島根芸術文化センターグラントワ いわみ芸術劇場

### 応募に至った経緯、および研修目的

いわみ芸術劇場でも、学校アウトリーチやワークショップも担当してきたが、演劇や音楽等に直接関係していない人たちと劇場がどのように接点を持つきっかけをつくれるか、課題と感じていた。また、ボランティアとして劇場に関わる人たちもいるなかで、地域住民が参加しやすい劇場として、関わり方のチャンネルを増やすことができないか。

世田谷パブリックシアターが実施するワークショップ事業から、劇場と市民の接点をつくり出すためのヒントを得



たいと思い、研修を希望した。

【研修期間】 2018年1月20日～2018年2月28日

【研修受入団体】 公益財団法人せたがや文化財団

【主な研修場所】 世田谷パブリックシアター

【研修内容】 区内の小学校を訪問する演劇ワークショップ授業の現場補助／「地域の物語ワークショップ」を中心とした各種ワークショップの補助（記録係、事前・事後の打合せへの同席）／主催公演の視察／発行誌の原稿作成補助／関係者へのヒアリング など

### 研修の成果と課題

学校アウトリーチでは、同じクラスで複数回実施することが初めての経験で、曜日、時間帯、天気によっても子どもたちの様子に変化するということが発見でした。初回には、劇場はどんな場所なのか、自分たちは何をしている人なのか、児童に対して説明をします。現場では劇場スタッフは裏方として控えるべきと思っていましたが、きちんと子どもたちと関わっていく、ワークショップ事業そのものに対する考え方が大きく変わりました。

私が一番関心を持っていた『地域の物語ワークショップ』にも携わることができました。数回の過程に同席するなかで、演劇作品を上演することを主眼に置かないことで、テーマに関心を持って参加する人が多いという印象が強かったです。こうしたテーマを決定するに当たり、社会的課題、地域のニーズについてアンテナを張っておかなければならないことを強く感じました。

また、ワークショップ事業では、事前の打ち合わせが非常に細かにされていたことも発見の一つです。何を、どのように、どれくらいの時間配分で、何のためにするのか、関わる全員で共有されていくことの大切さを見い出しました。

そして、やはり一番は、他劇場の仕事のやり方に触れることができたことです。とにかく記録をたくさん取り、それを文字にして残すことで、たとえ担当者が変わっても行われてきた事業の実績や問題点が劇場のなかに残していくことができるのだと実感しました。会議や打ち合わせも、口頭だけでなく、その場で文字にして共有することの効果を感じました。

こうした発見があるなかで、やはり成功例の裏側には、細かい打ち合わせや、長年にわたる劇場スタッフとアーティストとの信頼関係の積み重ねがあることも分かりました。優れた取組をしているアーティストに、うちでもお願いします、と頼んで形だけ真似ても上手くいくわけがありません。劇場スタッフの力量が問われます。いわみ芸術劇場および島根県における地域の課題、ニーズ、暮らしている人々の実態を捉えることが必要です。

### 今後の展望

まずは、職場内で私が体験したことを共有したいと思います。事業計画に影響させるにはスケジュール的に今からは難しく、すぐに新規事業などに結びつけることはできません。しかし、一緒に劇場で働くみんなの見方や関心、考え方を互いにすり合わせ、いわみ芸術劇場では何ができるのかを考えていきたいと思います。

そしてもう一つ。他劇場の皆さんとのつながりを、もっと積極的に持つようにしていきたいと思います。芸術のための芸術にならないよう、劇場が社会のために何ができるか、他者の視点を得るためにも自身の劇場の外にも、いろいろな立場の人たちとのつながりは大切だと思うのです。

県民の皆さんにとって、いわみ芸術劇場は公演を観に行くだけでなく、生活のなかに活かせる何かを得られる場所になればいいなと思います。

## 樋口 寿弥

アクティオ株式会社／知多市勤労文化会館 館長

### 応募に至った経緯、および研修目的

2015年からアクティオが指定管理者制度で知多市勤労文化会館を運営することになり、劇場での勤務を開始。劇場運営に携わった経験もないなかで、運営状況を少しでも改善しようと努力を続けてきた。しかし、劇場が地域にとってなぜ必要なのか、自分の言葉で上手く説明ができないことにもどかしさと罪悪感を持っていた。知多市と同規模の人口である可児市で、劇場の意義を発信し続ける衛館長のもと、劇場職員がどのように地域の人々と関わり、事業を生み出し、進めているのか、自身の目で確認したいと思った。研修費用や自分が外に出る時間の捻出も、研修という目的で本制度を活用すれば可能になると考え、応募した。



【研修期間】 2018年1月5日～2018年3月4日

【研修受入団体】 公益財団法人可児市文化芸術振興財団

【主な研修場所】 可児市文化創造センター ala

【研修内容】 衛館長によるゼミ／公演の現場補助／演劇手法を用いたコミュニケーションワークショップの現場補助／市民ミュージカル『君といた夏』、関連企画『現代キッズ・ヤングよ、これがSHOWAだ』制作補助

### 研修の成果と課題

今回の研修を通して、劇場職員と地域の人たちとの関係こそが資本であり、地域の劇場にとって必要であると確信しました。市民ミュージカルの稽古場でも、劇場職員が参加者と丁寧に向き合い、接している様子を目の当たりにしました。また、小学校に赴いて実施したワークショップの最中には、児童から「最近alaにいる人だよ」と声をかけられました。子どもたちにとって、1回きりの授業だけの接点ではなく、様々な場面で劇場との関係があるのだと驚きました。

そして、劇場職員が、地域の課題の中から事業の種を拾っていること。そこから実現した事業でまた人間関係ができ、また新たな事業が生まれ、そうした繰り返しによって地域に合った仕組みや、独自の文化が育っていくのだと感じました。私は当たり前のように、劇場がセレクトしたものを観客に観せるものと思い込んでいました。受益者を増やすということについて、あらためて考えさせられました。

また、月2回、衛館長による館長ゼミという形で、劇場職員同士がミッションを共有する場をもうけていることにも影響を受けました。毎回、衛館長が劇場の一番大切なミッションについて徹底的にお話されるのを見て、もしかしたら自分の諦めのような気持ちが、一緒に働くスタッフにも伝染しているのではないかと深く反省しました。

私の会社だけでなく、指定管理者制度そのものが大きな問題を抱えています。多くの職員が有期雇用で、人が変わる度に積み上げたスキルや、地域の人々との関係が振り出しに戻るように思えてなりません。しかし、人員不足のせいにする前に、指針を持ち、それをスタッフに共有する場をもうけることが先決だと分かりました。自分が館長として何をすべきか、今の立場や状況のなかで事態を好転させることが本当にできるか、あらためて大きな課題を突き付けられた研修でした。

## 今後の展望

まずは、研修で得た指針をスタッフと共有するために、できることから実行し、理解者を増やす努力をしていきたいと思ひます。それから、行政に提案する機会を逃さないよう、市民から信頼され、必要とされる場所にするための目標を見つけたいと思ひます。支持されるような運営をしていくことが必要だと。そして、事業の現場で生まれる人と人のつながりや変化を、知多市でも実現できるよう、さらには独自の作品が生まれるような取組もしていきたいと思ひます。

何よりも、地域の団体との関係の中で生まれる発見を大切にすること。劇場職員の一人として、届きにくい小さな声も、聞こうとする努力をし続けたいと思ひます。

### 小川 恵祐

南城市/南城市文化センター シュガーホール

#### 応募に至った経緯、および研修目的

小規模地域における公共ホールの役割について考えるべく、研修に応募した。とくに、本制度を活用できるならば自身にとって馴染みがない地域に行けると考え、山陰地方を希望した。シュガーホールは市の直営のもと運営されているが、数年後に初めて指定管理者制度を導入する予定というターニングポイントにあり、指定管理者制度のもとでの劇場運営のノウハウを学ぶことも目標とした。



【研修期間】2017年11月22日～2018年1月17日

【研修受入団体】公益財団法人しまね文化振興財団

【主な研修場所】鳥根県芸術文化センター グラントワ いわみ芸術劇場

【研修内容】主催公演8本、アウトリーチ4本の制作補助/地域の文化関連団体、市民ボランティア等へのヒアリング

#### 研修の成果と課題

いわみ芸術劇場では、フランチャイズ団体との独特な関係を築いています。その一つに、県の無形文化財に指定されている「益田糸操り人形」の保持者会があります。これを、育成団体と位置付けて、劇場が事務局の機能を担い、劇場職員が公演や稽古にも立ち会うというのです。保持者会にインタビューをしたところ、無形文化遺産に指定されてもわずかな経済的支援があるだけで、継承と発展への責任が重大になるけれど、劇場による人的支援は非常に稀有でありがたいと仰っていたのが印象的でした。

また、石見地域の中学校には合唱部がなく、ある中学生が「歌が足りない」と言ったことをきっかけに、劇場職員、地域の小中高校の音楽教員、特別支援の音楽関係教員らが主導して、自主的企画として「いわみ合唱塾ティーンズ・プロジェクト」が生まれています。結果的には、これは「グラントワ・カンタート」という合唱祭の関連プロジェクトとして行われましたが、演奏機会の少ない地域の学生らに、パフォーマンスの場を与えるものとなりました。

こうした事業を目の当たりにして、地域の団体を支援し、地域の声を拾い上げ、信頼関係を築いていく姿勢から大きな示唆を得ました。劇場と地域の人々が、奉仕者と享受者という一方的な関係を越えて、文化振興というミッションを共有していると感じました。

ただ、2ヶ月間の研修では、事業の当日対応の補佐にとどまり、準備段階から事業に対して関わることができなかったため、実践的なノウハウや知識を得ることは難しかったです。

## 今後の展望

南城市は、人口規模は、益田市と比べてすこし少ないくらいです。しかし、沖縄戦によって一度、コミュニティが崩壊してしまった歴史がある地域です。

こうした背景もあり、今回の研修を通じて地方の公共ホールは、“インフラ的な役割”と“新しい広場”の二つの役割があるのではないかと考えました。インフラ的な役割は、いわみ芸術劇場で見たような、地域団体への人的支援、地域の人々のニーズを汲んで足りない部分を補うこと、地域に寄り添って活動をしていくことなのではないかと。そして、“新しい広場”として、年間を通して多様な芸術を提供していくこと。

シュガーホールも、地域と公共ホールが互恵的な関係を築き、さらには地域の文化振興のミッションを共有して遂行していけるような関係を築けるよう、自身の知識や実務能力の向上にも努めていきたいと強く思っています。

### 五田 詩朗

演奏家/NPO法人こどものみかた 主宰

#### 応募に至った経緯、および研修目的

演奏家としてオーケストラへのエキストラ出演を中心に活動してきたが、2011年の東日本大震災を機に演奏家として社会とつながる方法を模索しはじめ、2015年にNPO法人を立ち上げた。しかし、事業制作の経験不足という課題に直面。事業制作のノウハウを習得することを目的として研修を希望した。



【研修期間】2017年10月18日～2018年1月31日

【研修受入団体】ミュージア川崎シンフォニーホール

【主な研修場所】ミュージア川崎シンフォニーホール

【研修内容】行政や芸術団体と公共ホールの連携モデル、地域交流、人材育成事業にも着目し、次のような研修を行なった。

「出張わくわくミュージア！～手作り楽器で手作りミュージック～」の企画、運営の実践/「ジュニアプロデューサー/リトルミュージア事業」総括の立ち会い、ヒアリングによる研究・考察/川崎市、ミュージア川崎シンフォニーホール、東京交響楽団の連携についてヒアリングと研究・考察

#### 研修の成果と課題

研修では、実践のなかで自身で課題を見つけ、研究を深めるような形を取らせていただきました。例えば、「出張わくわくミュージア！」という、ワークショップ事業を企画から担当しました。ホールの向かいにある東芝未来科学館を会場として、楽器づくりのワークショップを企画し、全4回で148名の参加を得ました。ミュージア川崎の職員の助けもあって進行も問題なく、ミュージア川崎のPR効果も得られたと思います。一方で、自由な発想を促したいアーティスト側と、工作教室のように段取りを大切にしたい東芝の担当者との、会場の雰囲気作りの面での意識共有が足りなかったと反省しました。また、アンケート調査を忘れたため参加者の声をリサーチできなかったこと、当日の人員配置が準備不足だった等、自身の見通しの甘さを痛感した部分もあります。

ジュニア・プロデューサー<sup>1)</sup> 事業では、数ヶ月にわたりコンサートの企画制作に携わってきた子どもたちの声を聞き、この事業そのものが一連のワークショップであると感じました。子どもたちはホール職員と同じ目線で考え、コンサートの成功だけでなく、チラシを置いてもらうのはどこが効果的か、図書館や病院はどうかと考える過程で、地域にある施設の機能や人々の動き、反応を想像しながら進めます。自分が歌ったり演奏するだけでない、音楽の新しい価値観を育むきっかけになっていると感じます。音楽を取り巻く社会の価値観、視点を育てる取組の一つであり、新しい人材育成モデルだと思いました。

川崎市、東京交響楽団、ミュージア川崎の関係性についても研究することができました。三者が、利害関係を超えて、目的を共有しながら活動していくこと。文化芸術の街づくりの一環としてホールが設置され、そこを拠点にするオーケストラが定期的に演奏会を行う、地域の人々にとって音楽を身近に、自分たちの街のオーケストラとして応援してもらう関係を生み出しているのではないかと感じました。その一片にふれることができたのは大きな経験です。

## 今後の展望

研修を通して、行政、芸術団体、公共ホールの理想的な連携モデルを体感し、劇場・音楽堂が持つ大きな可能性に着目することになりました。事業制作も含めて、自身の課題であった“社会とつながる方法”が、ミュージア川崎シンフォニーホールでは実践されていたのです。

そして、公共ホールが社会的役割を担い、機能するためには、行政、芸術団体との連携が不可欠だと認識しました。公共ホールの可能性を感じたことで視点が変わり、実はいま、制作者を目指してキャリアチェンジを図っています。制作者募集のお話があればぜひご連絡をいただければ！（笑）

1) 2013年より、ミュージア川崎シンフォニーホールが実施する事業。川崎市内から十数名の小学生を公募し、東京交響楽団メンバーによる室内楽コンサートを、子どもたち自身が企画・制作・運営するプロジェクト。

## 高橋 郁乃

公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンシル新潟

### 応募に至った経緯、および研修目的

新潟市芸術文化振興財団では、新潟市民芸術文化会館をはじめ、いくつかの文化施設の運営も行なっている。アーツカウンシル新潟として地域の文化振興に携わる上で、地域の文化芸術拠点である公立文化施設の管理運営について学び、地域のアーツカウンシルが果たすべき役割を再検討するべく、研修に応募した。



【研修期間】2017年10月1日～2018年2月28日

【研修受入団体】公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団

【主な研修場所】ロームシアター京都

【研修内容】劇場の運営管理セクションの日常業務の補助、打合せ等の立ち会い／貸館対応補助（利用者との事前打合せ、当日対応、イベントカレンダー作成等）／劇場稼働率の集計、資料作成／寄付制度に関する営業（同席）／近隣大学のアートマネジメント関連授業への同席と考察

### 研修の成果と課題

改修中の南座に代わり、ロームシアター京都で吉例顔見世興行が行われるという初の試みに立ち会うこと

ことができました。顔見世興業は貸館事業の一つとされましたが、まねき上げ等、歌舞伎ならではの慣習を安全面に配慮しながら可能な限り実現するために、綿密な打ち合わせと準備が行われました。興行の受け入れに同席したことを通じて、劇場の管理運営とは、利用者あるいは観客の視点を意識し、劇場全体の見せ方をマネジメントするということだと思いました。

この一連の準備のなかで、劇場職員の「劇評だけでなく、劇場評を書いてほしい」という言葉が印象的でした。どんな性質を持った劇場なのか、公演を受け入れるためにどんな工夫が行われたか。そうした部分の評価は、作品評価のなかでは、当然書かれることはありません。管理運営の専門性に対する注目、認知がされていないということなののでしょうか。貸館事業は、ただ場所を提供するだけでなく、その劇場でなければ実現しえない工夫を考え、提案すること。そこに、劇場のアイデンティティが表れるのではないかと感じました。

公立劇場は、質の高い芸術に出会える場であることと、市民に広く利用される場であることの両立が求められていると思います。その点において、ロームシアター京都に併設されている書店、カフェ等が、劇場の「賑わいスペース事業」として目的内利用とされていることは注目すべき点です。公演等がない時でも、来訪・滞在する人の流れをつくりだすように、考え設置されています。

自主事業をどう展開していくかによって、ソフト面のアイデンティティは確立できますが、貸館事業を含めた施設の見せ方は、管理運営する側に委ねられています。それは、市民に対して、施設の存在意義を明確にする手段の一つになるのではないかと思います。

## 今後の展望

アーツカウンシル新潟での業務に戻り、あらためて感じることは、劇場設立時の目標と達成状況を精査し、明確化することが必要ではないかということです。りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館は、開館20年を迎えました。この20年で、設立時の目標のうち、何が達成できたか、あるいは達成できなかった点も含めて今後は何をしていくべきか、考えなければならないのだらうと思います。その際に、事業の本数、来場者数だけでなく、市民から劇場がどう見られているかについても、評価の一つの視点として持つべきではないかという視座を、研修を通して得られました。

そのためにも、自分は“公共の富を扱うプロフェッショナル”になりたいと思います。市民の税金を投入して作られた劇場が、芸術愛好者だけではなく市民にどう見られているか、戦略や見せ方を考えていくことは、劇場管理の専門性が表れるところだと思います。アーツカウンシル新潟として、新潟市における文化芸術のあり方を考えるなかで、劇場や市民団体と、適切な関係を築いていけたらと思っています。

## 石川 絵理

NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net） 事務局長

### 応募に至った経緯、および研修目的

TA-netでは、聴こえない当事者としての経験を活かし、劇場での公演あるいは広報の際の情報支援など、実演芸術へのアクセシビリティを高めるための活動に取り組んでいる。しかし、自分には実演芸術の創作過程に関わった経験は無いため、現場で必要とされる知識を身につけるためにも、創作プロセスを学ぶ機会が急務の課題だった。また、今後全国で活動を広げるためにも、地方在住の障害当事者や劇場・芸術団体らとのネットワークを構築したいと考えていた。ただ、自身が聴覚の問題を抱えているため、研修に際しても手話通訳等の情報支援が必須である。これにか



かる経費を自己負担することは厳しいため、給付金がある本制度に応募した。

【研修期間】 2017年10月5日～2017年12月3日

【研修受入団体】 ビッグ・アイ共働機構

【主な研修場所】 国際障害者交流センター ビッグ・アイ

【研修内容】 バリアフリー公演の制作補助（当日までのプロセス、当日の障害対応の実践）／ネットワーク構築を目指して、近隣の芸術団体や障害者団体等へのインタビュー ※すべて手話通訳者を手配し、同行。

### 研修の成果と課題

研修に当たり、研修計画について、研修先と事務局と三者で綿密に相談しました。自身に情報支援が必要であり、手話通訳は約1ヶ月前には手配をしなければならず、研修の実働日、実働時間、内容を事前に確定する必要があったからです。その上で、通訳者の手配は自身で行いました。この点は、他の研修者の皆さんと違うでしょう。

研修を開始してから最初に、鈴木京子さんから、ビッグ・アイの役割、エグゼクティブ・プロデューサーの役割、鑑賞サポートの考え方についてレクチャーを受けました。これを経て、ビッグ・アイで開催されるイベントの運営スタッフの一員として、受付対応や記録係として携わりました。当日までのプロセスだけでなく、受付や会場での様々な障害への対応を考え、実践することができました。時には、より良い対応のために、当事者としての意見をもらう機会も得られ、より具体的に対応を考えることができました。また、外部研修という形で、近畿地方の障害者施設等への訪問、インタビューの機会も得られ、おもに聞こえない当事者たちの希望や生の声を拾うことができました。

研修を通して、今後のTA-netの活動を考える上でも課題として見えたことは三つ。一つは、手話通訳者の問題です。通訳者が同行することで私も研修が可能になったものの、実演芸術に関する知識が乏しい通訳者では、利用者が得るものも少なくなってしまうことです。また、通訳者の数も限りがありますので、研修の日程調整の際に通訳者の都合も調整が必要なため、断念したものも多かったです。

二つ目は、障害者が鑑賞したい時に、介助者の手配、依頼できる時間の制限、チケット代負担の問題。

三つ目は、障害といっても様々なものがあり、一人ずつ丁寧に対応する必要があること。そして、そうしたニーズにどこまで応えるか、応えられないときにどう対応するか、悩みを抱え込むのではなく、成功例だけでなく経験の蓄積と共有を図っていくことが大切だと感じました。

### 今後の展望

「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律<sup>1)</sup>」が施行され、ますます鑑賞・参加機会の拡充と支援の仕組みづくりは、国、地方公共団体、そして実演芸術関係者らが連携して取り組まなければならない課題と考えます。

TA-netでは、劇場や芸術団体と障害のある観客とをつなぎ、公演のアクセシビリティ環境を構築するアクセスコーディネーターの養成に2017年度から取り組んでいます。これを全国に展開し、アクセスコーディネーターの能力向上と情報交換のためのネットワークを築きたいと思っています。並行して、協働する手話通訳者や盲聾通訳介助者の養成にも協力していきたいと考えています。劇場や芸術団体への啓発も重要です。観客として迎えるに当たり、どう対応すべきか、実務者向けの実践講座にも協力していきたいです。

そして、鑑賞に不安を抱える人たちに、一緒に観に行きましょう、きっと面白いですよ、という情報発信を続けていきます。

1) 平成30(2018)年6月13日に公布、施行。

[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/geijutsu\\_bunka/shogaisha\\_bunkageijutsu/1406260.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/1406260.html)

## 総括

進行：楢屋 一之（神奈川県国際文化観光局舞台芸術担当部長 兼 青少年センター参事）



楢屋 6人に、それぞれ個性ある発表をしていただきました。選考委員の一人として、研修先のマッチングにも関係した立場から感想を申し上げます。

今日の発表を聞いて、改めて深く感じたことです。

私自身、長らく創造型の公共劇場の運営や企画制作に関わってきましたが、創造型の公共劇場はこのままの状態に進んでいいのか、ここ数年の自分自身の課題でもあります。1990年代後半に立ち上がった創造型の公共劇場は、新しい作品創造と同時に、地域のコミュニティの新しい形の活性化を図るために人材育成や啓発事業を積極的にやるべきだというミッションがあったはずですが。

しかし、企画制作に携わる我々は、より良い作品創造のために注力しがちです。すると、地域のコミュニティの活性化、普及啓発、人材養成といった役割を見失いがちになります。

6人の話を聞いて、キーワードとして残るのは、やはり地域や地域コミュニティ、社会包摂、共生社会。あらためて文化芸術の社会的な価値や意義とは何かを考え、全国の公共劇場は何ができるのかという基本を、現場にいる我々は問われているのではないかと強く感じました。

そうすると、地域、共生、社会包摂といった当たり前のように使っている言葉に対して、もう一度捉え直して、地に足の着いた活動をしていかないといけないのではないかと思います。

佐々木 研修で携わった『地域の物語ワークショップ』

プ』は、参加者を一括りにできるものではなく、一人ひとり個性があり、参加者同士も影響しあって、ワークショップ中だけでなく日常生活においてもつながるきっかけになるような時間だったと感じています。

だからこそ島根に戻った時にも、職員や事業で関わる人や、そこに流れている時間、出来事一つひとつが集まって、「地域」ができていたのだと感じさせられました。

やはり形だけやっても駄目だということ、自分が関わる地域で何ができるのかを、研修で得た視点を活かしながら実践していくことが大切だと感じています。

樋口 alaでの研修前は、どうやって観客に来てもらうかという視点しか持っていませんでした。アウトリーチとして劇場の外で実施するとか、来てもらうかという形の問題ではなく、こちらから向かっていく姿勢を発見したことが一番大きな収穫だと思います。

楢屋 可児市の職員もいらしているので、研修者を受け入れての一言をお願いしますか？

参加者A 樋口さん、研修お疲れ様でした。alaでは、様々なコミュニティプログラムを実施していて、樋口さんにはおもに市民参加プロジェクトである市民ミュージカルを中心に研修していただきました。市民一人ひとりをしっかり見るということを体験していただけたかなと思います。

参加者B 樋口さんは、初日にご自身の会館の現状

をお話して、衛館長から「そんな会館はなくなってしまえ！」と強烈な洗礼を受けました(笑)。

それでも挫けず、劇場運営のいろいろな痛みを抱えているのを何とかしたいと、研修続行を希望して一緒にやっていくことになりました。一つひとつ丁寧に市民と直接関わりながらやっていただきました。

私たちが、樋口さんとの情報交換のなかで、全く異なる環境にある開館の現状など、教えてもらうこともありました。どういう劇場を目指していきたいのか共有する部分もあり、私たちにとっても今回の研修受け入れは実りある体験だったと思っています。

**参加者A** もう一つ、alaではとくに地域の社会的課題をしっかりと見つめて、それに対して文化芸術が何かできないかと考えています。例えば、学校での演劇ワークショップでは、演劇を好きになってもらおうという普及啓発という視点ではなく、演劇の手法を活用して、クラスづくりや仲間づくりをして、いじめや孤立を防ごうという視点で展開していくことです。芸術の力を借りて、社会的課題に向かっています。

**楢屋** ありがとうございます。続いて、小川さん、研修報告に加えて一言どうぞ。

**小川** 「地域」というキーワードに対して、少し回答が難しいです。私は昨年からシュガーホールに勤務し始めたので、劇場での仕事はまだ1年半しか経験がありません。東北の出身で、沖縄に移り住んだのも4年前です。沖縄は社会課題だらけというか、まず言語もかなり違うので、地域のおじい、おばあや職場でも、私以外はみんな地元出身なので方言で話しますし、正直コミュニケーションがすごく難しいです。

大学では文化人類学や民族音楽学の研究をしてきたので、実は今も地域についてのフィールドワークをしているような意識もあります。

一つ言えることは、沖縄には字(あざ)というコミュニティの単位があって、それぞれに地域の祭りや芸能がたくさんあります。そのなかで、シュガーホールはクラシック中心の音楽ホールなので、存在意義が問われます。



**楢屋** 続いて五田さん。研修報告は非常に整理されていて面白かったです。今回の研修は、人生のターニングポイントになったようですね。

**五田** まず地域とのつながりについては、ミュージアム川崎は成功例だと思います。やはり設置される前から、このホールで何をするか、ミッションや目的が明確にされていて、だからこそ今でも軸がぶれることなく機能してこれたのだと思います。

2012年に「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」ができるまで、劇場施設に関する法律はありませんでした。そのなかで、数千館のホールが全国にはあったのです。何をやるのか、何のためにやるのか、明確なミッションを持った施設がどれだけあったのかと疑問に思います。

私は今、アーツアカデミー<sup>1)</sup>に参加していますが、実践だけでなく、多くの劇場に視察に行かせてもらっています。そこでも思うことは、地域課題は実に様々であり、他地域の事例をそのまま真似れば成功するものではないということです。地域には必ず課題があるので、地域の人たちと話し合うことで何が課題なのかを掘り出すことが、まずは必要だと思います。

私自身は、やはり音楽が一番素晴らしいと思いますが、どのジャンルの芸術も、絶対にコミュニケーションツールとしての機能があるはずだと思います。その劇場が持つ機能と合わせて、何が相応しいのか。予算が大きければ良い事業ができるというわけでもないでしょうし、やり様はいろいろあると思います。

**楢屋** 続いて、全国に先駆けて華々しくスタートし、我々もその動向を注視しているアーツカウンシ

ル新潟の高橋さん、どうぞ。

**高橋** 沖縄や東京のアーツカウンシルに比べればまだ小さい組織です。

りゅーとぴあは20周年を迎えましたが、新潟市における文化芸術の拠点施設の一つという位置づけになっています。市内には、各区にも文化会館がありますので、これらとの連携を考えている段階です。どこまでを地域と呼ぶのか。りゅーとぴあの場合は、新潟市内全域、もはや全国をターゲットとしているのではないかと。

各区との連携においても、それぞれの地域の課題があるなかで、平均化して連携を進めることが果たして良いのかどうか、考える必要があると思います。連携する地域、内容をどこまで広げるべきなのかも、考えなければいけないかと思いました。

**楢屋** では最後に、石川さん。

**石川** 2011年の震災の時、障害者の死亡率は、障害のない人の2倍でした。そのなかでも、暮らす地域になじんでいる人、コミュニティに参加できている人ほど存命率が高かったというデータがあります。

劇場に行くということが、家から出る、引きこもりから脱する機会になりえます。外出するために、車やその他の交通手段を使ったり、外食をする、チケットを買う、おしゃれをする、パンフレットを買う等々、経済効果にもつながると思うのです。

趣味を楽しむ、趣味にお金を使う、そうした目標ができれば障害者の働く意欲も上がると思います。良い循環が生まれることを期待しています。

ですから、障害者が地域になじむこと、もっと家から出ている環境を作っていくことが大切だと思います。

**楢屋** 皆さん、ありがとうございました。このフェローシップ制度は、受け入れ先となった劇場団体の



1 「東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修」としてアーツカウンシル東京と東京芸術劇場が実施する事業。東京の芸術文化事業を担う人材を育成するプログラムとして、現場調査やテーマに基づいた演習などを中心としたコース、劇場運営の現場を担うプロデューサー育成を目的とするコース等を実施している。

## 第2部 「新たな顧客創出にむけた取り組みの広がり」

第2部では、とくに芸術以外の分野と連携したプロジェクトの事例、そしてネットワークを活かした巡回公演の事例、地域の観客層を広げる展開の事例をご紹介します。

### 『耳で聴かない音楽会』実施における連携プロセス

山岸 淳子 | 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

2018年4月に実施した『耳で聴かない音楽会』は、聴覚障害者を対象とした公演で、日本フィルハーモニー交響楽団としても初めての経験であり、非常にチャレンジングな試みでした。

#### 日本フィルハーモニー交響楽団の活動

日本フィルハーモニー交響楽団（以下、「日本フィル」とする）は、年間150回程の公演をしています。日本のオーケストラはかなり活発な活動をしているのですが、そのなかでもこの公演数は非常に多いと言えます。リハーサルも含めると、オーケストラとしての稼働日数が年間260日前後、加えてオーケストラ以外のアクティビティを年間260回実施しており、これはおもに楽員が担当しています。30名規模の大型室内楽、4～5名で出かけるアウトリーチ活動、音楽創作ワークショップなどです。この他スタッフが主導する中学生の職業体験の受け入れ、バックステージツアー等もあり、規模も種類も様々な取組を行なっています。



こうした事業はすべて、あらゆる方々と音楽の感動を分かち合う、という楽団のミッションに基づいています。

#### 事業のコア 活動の3本柱+1

- ①オーケストラ・コンサート
- ②エデュケーション(教育)
- ③リージョナル・アクティビティ(地域活動)
- +被災地へ音楽を(阪神大震災1995-96、東日本大震災は2011-継続中(263回)、熊本2016-)

障害のある方々に音楽を届けるために、主催公演の鑑賞支援として、チケット価格の割引、点字プログラムの作成、ボディソニック(体感音響システム)の活用をしています。また、病院や学校等へ出張し、実情に応じたプログラム提供もしてきました。

#### 『耳で聴かない音楽会』とは

落合陽一氏(メディアアーティスト、筑波大学准教授)を監修に迎えた室内楽コンサート。会場には、音を身体で感じられるツールとして、ORCHESTRA JACKET<sup>1)</sup>、SOUND HUG<sup>2)</sup>、Antenna<sup>3)</sup>を用意し、情報保障として手話通訳、PC速記、FM補聴システム、ロビー案内手話通訳を手配しました。

演奏は通常の演奏会と変わりませんが、舞台上にスクリーンを二つ設置。一つには口語をPC速記により文字化して投影し、もう一つには音を色や光で視覚的に表現する試みを取り入れました。こうしたテクノロジーを取り入れた取組は反響が大きく、各種メディアでも取り上げられました。

#### 実現までのプロセス 三つの要因

コンサートが成立した要因は三つあります。一つは、ORCHESTRA JACKETという具体的なデバイスと出会い、落合氏と連携するというアイデアが生まれたこと。二つ目は、アーツカウンシル東京の社会支援助成の公募があり、資金調達が可能になったこと。三つ目は、クラウドファンディングで520万円の資金が得られたことです。

オーケストラジャケットは、聴覚障害者のために開発されたものではありませんが、これを体験した聴覚障害の方が「音楽が分かった」とtwitterで書き込みしているのを見つけたことがすべての始まりでした。このジャケットをきっかけに、新たな観客と出会えるのではないかという思いでプロジェクトをスタートし、これまで付き合いのない分野を含めて多くの方々と連携して進めてきました。

テクノロジーだけでなく、障害と音楽の両方に詳しい人が必要だということで、特別支援学校の音楽教員にも協力を依頼しました。会場も、ヒアリング・ループ<sup>4)</sup>の設備やバリアフリー対応が可能な会場を探しました。会場の事務担当者、舞台技術者、ボランティアの方々にも、並走者のようにプロジェクトに協力していただきました。

#### コンサートを経て 日本フィルが得たもの

楽団が得たものは、もちろんノウハウの蓄積もありますが、何よりも、聴覚に不安を抱える皆さんに喜んでいただけたこと、観客の満足度が高いコンサートができたことです。

また、資金面だけでない支援者を得られたこと、楽団が主導して新しいコミュニケーションを実現したこと、これまで付き合いがなかった分野の方々と出会うことができたこと、そしてこうした挑戦をこれからもやっつけていこうという気運が醸成できたことが挙げられます。

これまでのオーケストラとしての活動、障害者支援の実績が非常に高く評価されていたことも、このコンサートの成功につながったと思っています。ただ、あくまでも我々は芸術創造団体であり、障害者支援団体ではありません。これからの活動をどう展開していくかについては、検討が必要ではあります。

しかし、障害者のためにという視点ではなく、音楽を通してより多くの方々に芸術の魅力を伝えるという目的のために、望めばいろいろな方との連携は確実に実現できるのです。成功させたいという思いを共有できれば。求めれば与えられる、ということプロジェクトを通して実感しました。

#### 日本フィルの活動に「テクノロジー」と「障害者コミュニティ」が新たに加わった

冒頭で、日本フィルの活動の3本柱を説明しましたが、このプロジェクトではそれにテクノロジーや障害者コミュニティが合わさりました。次なる展開として、医療機関との連携も試んでいます。モノづくり、街づくり支援等、芸術から派生していろいろの方々と連携しながら、取組の開発を始めています。公的機関・民間を問わず、ジャンルも問わず、音楽というものを誰に伝えたいかをはっきりしていれば、さまざまな連携は可能になると感じています。



写真提供: 日本フィルハーモニー交響楽団

- 1) ORCHESTRA JACKET. 博報堂が落合陽一氏と株式会社GOとの協業により開発した着用型デバイス。楽曲を演奏パートごとに録音、分解し、ジャケットに仕込まれた数十の超小型スピーカーから再生することで、全身で音楽を聴いているような感覚を実現できる。
- 2) 抱きかかえることで音楽を光と振動で感じられる球体型デバイス。クラウドファンディングで開発資金を募り、この公演のために落合氏が新たに開発した。
- 3) 富士通が開発。ヘアピンのように髪の毛に装着し、振動と光によって音の特徴を伝えるもの
- 4) 難聴者の聞こえを支援する設備。ループアンテナ内で誘導磁界を発生させて音声磁場をつくることで、ループ内が聞こえやすい空間になる。ループアンテナを輪のように這わせることから、磁気ループとも呼ばれる。

落合氏とも、今度は視覚芸術とも連携を広めていこうと話しています。2018年8月には、またSOUND HUGやAntennaを活用して、聴覚障害者もそうでない人も一緒に聴いていただけるコンサートを開催します。

私たちは、音楽というミッションでつながる人々と一緒に、熱意とノウハウをシェアしながらやっていきたいと思っています。それも、会場がなければできないことですので、劇場・音楽堂の皆さんとも一緒にできることがあると思っています。

また、劇場・音楽堂でもさまざまなバリアフリーの試みが行われています。私たち芸術団体も、文化施設の試みを伺うことで気付くこと、互いの力だけではできないけれど、一緒にやることで可能になると感じました。皆さんと情報交換し、知見を広げ、今後の連携につなげられればとても嬉しく思います。

落合陽一×日本フィルvol.1『耳で聴かない音楽会』 2018.4.22 於:東京国際フォーラム ホールD7  
落合陽一×日本フィルvol.2『変態する音楽会』 2018.8.27 於:東京オペラシティコンサートホール

## 穂の国とよはし芸術劇場 (PLAT) の活動について

矢作 勝義 | 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT

### PLATを取り巻く環境

豊橋市は、愛知県の東の端、静岡県との県境に位置します。現在は県内で4番目の規模の市で、どちらかというとう人口はゆるやかな減少傾向にあります。豊橋駅は、新幹線ひかり・こだまの停車駅ですが、のぞみは通過します。ただ東三河地区では、名鉄線、JR東海道線・飯田線等が発着する駅ですので、周辺の人々が集まりやすい場所です。また、名古屋までは在来線で約1時間、浜松までは30分程度ですので、名古屋より浜松方面からの行き来が多いエリアです。

豊橋市は東三河（愛知県東部）の中心都市という自負もあり、東三河地域の芸術文化振興のために2013年4月に開場したのが、穂の国とよはし芸術劇場PLAT（以下、「PLAT」とする）です。主ホールが778席（うち多目的室が7席）、アートスペース（もう一つのホール）266席、それに稽古場（創造活動室）、会議室・展示室（研修室）等があります。

私は以前、世田谷パブリックシアターに勤務していましたが、豊橋に移ってきて分かったことは、この地域では在来線30分圏内が集客圏だということです。名古屋と豊橋の中間、少し東寄りの方面から多く来ていただいているようです。それから、浜松にはヤマハやカワイ楽器の本社があることから優れた音楽ホールはありますが、演劇に適した劇場はありません。そうした事情から、浜松方面から演劇鑑賞にお越しになる人も多いようです。

また、PLATまでは豊橋駅から直結した連絡通路があり、在来線の改札から徒歩5分弱で、雨でも濡れずに劇場へ来ることができます。



主ホール



アートスペース

### 連携によって広がるチャンス

PLATでは、とくに以西の兵庫、北九州地域の劇場と連携をすべく活動しています。豊橋市は、東三河地域の人人に優れた舞台芸術作品を提供する場となるべくPLATを設置したと、市の担当者から聞きました。他地域の劇場と連携しながら、巡回公演の一ヶ所として上演できるよう、自主事業に取り組んでいます。

これまでの取組を紹介すると、文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業<sup>5)</sup>」のネットワーク構築支援事業に採択された作品の上演館として、平成27（2015）年度は5作品、平成28（2016）年度も5作品、平成29（2017）年度は2作品に参加しています。この他にもたくさんのツアー公演を受け入れています。約200席のアートスペース規模のキャパシティを想定している作品は、地方で上演するにはチケット収入と事業費のバランスを考えると非常に難しいのですが、規模の大きい作品でできる限り事業費を節約しつつ、規模が小さい作品はコンパクトに実施し、工夫しながら提供する演目のバリエーションを増やしています。

また、PLATは芸術文化アドバイザーを置いています。開館から5年間は地元出身である平田満氏（俳優）、2018年4月からは桑原裕子氏（劇作家・演出家・俳優）が務め、劇場プロデュースで作品づくりもしています。2017年度に制作した『荒れ野』という作品は、桑原氏が作・演出、平田氏が出演し、豊橋、北九州、東京の3都市で上演。早川書房主催の「悲劇喜劇賞」を受賞することができました。

こうした積み重ねもあり、平成30（2018）年度は、ネットワーク構築支援事業の5作品に参加、この他ツアー公演が13作品の予定です。文化庁「文化芸術創造拠点形成事業<sup>6)</sup>」に豊橋市が申請し、「地域の文化芸術振興枠」で採択されたこともあり、ますますツアー公演の招へいに力を入れ、市民が実演芸術にふれる機会の提供に努めています。

### 〈2018年度主催事業における連携〉

ネットワーク構築支援事業	ナイロン100℃『百年の秘密』 シーエイティプロデュース『マクガワン・トリロジー』 二兎社『ザ・空気ver.2』 KAATプロデュース『華氏451度』 東京芸術劇場プロデュース『ゲゲゲの先生へ』
ツアー公演	新国立劇場プロデュース『赤道の下のマクベス』 新国立劇場プロデュース『1984』 『松竹大歌舞伎』 『キス・ミー・ケイト』 伊藤郁女『私は言葉を信じないので踊る』 新国立劇場プロデュース『消えていくなら朝』 劇団こぶく劇場『ただいま』 KAATプロデュース『不思議の国のアリス』 パルコプロデュース『チルドレン』 KAKUTA『ねこはしる』 カンパニー・デラシネラ『ドン・キホーテ』 木ノ下歌舞伎『糸井版 撰州合邦辻』 MONO『はなにら』

5) 文化庁による助成事業で、実演芸術の創造発信、専門的人材の養成、普及啓発に対する支援を目的とする。劇場・音楽堂等の会館が申請できる「特別支援事業」、「共同制作支援事業」、「活動別支援事業」と、会館および実演芸術団体が申請できる「劇場・音楽堂等間ネットワーク構築支援事業」（巡回公演の旅費・運搬費等が補助対象）がある。

6) 文化庁による助成事業で、地方公共団体を通して申請するもの。

## ミッションと現実のバランス

PLATが毎年これだけの公演数を実現してこられたのは、市の補助金があるから、助成事業に採択されたからだけではありません。やはり、豊橋市を中心とした東三河地域の方々に優れた舞台芸術作品を提供することが、一つの使命だからです。そして、開館6年目を迎えて良く分かったことは、地方にも演劇や舞台芸術を観たいと思っている人たちがたくさんいるのだということです。

しかし開館3年目ぐらいまでは、招へい作品もほとんどが1公演（1ステージ）しかできませんでした。これでは、多くの人たちへ機会を提供するには限界があります。徐々に公演回数を増やしていき、2017年度、2018年度の今では公演により3～4公演でも完売するほどになりました。

チケットが完売することは劇場としては非常に嬉しいし、その後の業務も楽にはなります。しかし一方で、前々から公演情報を入手していて、頑張っってチケットを取ろうとする人しか買えないということでもあります。劇場としては、「あの俳優が出るなら観てみたい」と興味を持ってくれた新しいお客様を迎え入れることができないということ。ですから、できるだけ公演回数を増やす努力をしています。

その代わりに、少しずつ作品数を絞っていくのもいいのかなと考えています。というのも昨今、劇場で働く人たちの過重労働の問題が深刻化しています。地域の人々のためにもできるだけ多くの作品を上演したいのは山々です。しかし、制作、技術スタッフの労力を軽減することも考えなくてはなりません。なんとかバランスを取っていこうと努力をしています。

## 「舞台芸術にふれたい！」というマインドをつくる

しかし、小劇場系、商業系、古典芸能も含め、パリエーション豊かになるように尽力したいという思いは変わりません。ただ作品数を増やすだけでなく、どうやってお客様を増やしていけるかを考えています。

観たいというモチベーションが上がるのは、演劇や音楽の経験があったり、舞台によって喜びを感じる体験をしたとき。そういう体験を持つ人をできるだけ増やそうと思っています。そこで、開館2年目からは、高校生や市民の方々と一緒に芝居づくりをしたり、教育委員会と連携して市内の小中学校でのワークショップ事業を拡大していく等、実施しています。

現在の学校ワークショップでは、メイン講師は東京から招いている状況です。将来的には、地元の人がワークショップファシリテーター（講師・進行役）を務めてワークショップを運営できるようにと、養成講座も始めました。

こうした形で、地元の人たちと一緒に関わっていくことで、劇場に足を運ぶ人たちが増えればと思います。劇場は何をやっているのか、劇場職員は何を考えているのか、市民に理解してもらうきっかけをつくること。そして、舞台芸術を自分が楽しむという指向を醸成し、劇場で上演される作品を観てみたいというマインドにつながるのではないかと期待しています。

また、PLATでも、舞台鑑賞や参加に不安を抱える人々へどうやって舞台芸術を届けることができるかを考え、展開し始めています。2018年6月には、「シェイプ・アーツ<sup>7)</sup>」から講師を招き、劇場で迎えるための研修ワークショップを実施しました。また、10月には、ジェニー・シーレイ<sup>8)</sup>氏を招いて障害のある人とない人が一緒に体験するワークショップを実施する予定です。

劇場職員も、観客に何を観せるかだけでなく、どういう形で観客を迎えられるか、劇場に足を運ぶきっかけをどのように作れるか、あらゆる人々を想定し、考えながらやっています。

## 地方劇場の希望の星に！

PLATがプロデュース作品をつくる、というのは非常に厳しい現実があります。演出家や俳優、制作者もやはり首都圏に集中していますし、稽古を首都圏でやらざるを得ないような状況も多いからです。

そうしたなかでも、2017年度にプロデュースした『荒れ野』は、3都市での上演を行いました。そして、第5回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞を受賞するというまったく予想していなかった快挙を達成し、本当に嬉しかったです。決して大規模な作品ではありませんが、地方の劇場でもこうして評価される可能性、希望を示すことができたのではないかと思います。

2018年10月に公演する親子向け作品『ねこはしる』（構成・脚色・演出：桑原裕子）は、2019年はツアー公演をしたいと考えています。

さまざまな形で、今後も地方から発信していければと思います。

## KAAT 神奈川芸術劇場の自主制作の取組と劇場間の連携事例について

伊藤 文一 KAAT 神奈川芸術劇場

### KAAT 神奈川芸術劇場の現状

KAAT神奈川芸術劇場（以下、「KAAT」とする）は神奈川県横浜市に位置する劇場です。1000席の大ホールと200席の大スタジオの二つを軸に、上演プログラムを構成しています。

他地域の劇場との連携を積極的に進めていますが、KAATの施設は自由に空間を変えられる仕様になっているので、KAATの施設だからできること、やりたいことを詰め込みすぎた作品をつくってしまうと、他で上演できる劇場がありません。ツアー公演を想定している作品では、やり過ぎない工夫もしています。

立地として、都心部からも電車で40分程度で、遠くもなく近くもなく。観客は都心部近郊からも多いですが、やや不便に感じられるようです。そこで、東京とは違う独自性を出そうと、KAATではさまざまなパリエーションの作品づくりに挑んでいます。

2011年の開館以来、作品創造をミッションの一つに掲げて活動しています。ですから施設内に、舞台面がほぼ取れる広さの稽古場（中スタジオ、アトリエ）も有しています。自主制作事業では、ここで約1ヶ月の稽古を重ねます。そうすると、担当スタッフは1作品につき3～4ヶ月は拘束されてしまうため、開館当初はなかなか自主制作事業を多くすることを躊躇していました。開館から7年目を迎えた今では、年間で14～15作品を自主制作しています。

ただ、これだけ制作する本数が増えると、公共劇場とはいえ、すべての経費を公的資金で賄えるわけではなく、チケット収入の割合が大きくなります。作品によっては、総収入の8割以上をチケット販売で賄わなければ上演が実現できないという状態もあります。

キャスティングでは、ネームバリューがある俳優を起用することも多いですが、公的資金のアドバンテージはありますので、芸術監督のもと、作品主義で年間プログラムを決定しようと心がけ、KAATならではのラインナップの傾向、オリジナリティを出したいと思っています。できるだけたくさんの方々の多様な作品を上演するためには多くの観客に観てもらわなければいけない、新しい観客を獲得するためにも、積極的に自分たちから各地へ足を延ばそうとしている、そんな段階です。



7) Shape Artsは、障害のある人々の文化へのアクセスの向上に取り組んでいるイギリスの団体。メンバーとしても障害当事者が多く参加している。障害のあるアーティストの活動機会の促進とともに、文化芸術機関にむけた研修プログラムの運営等、30年以上の実績を持つ。

8) 障害のあるプロの俳優やスタッフによるイギリスの劇団「グレイアイ・シアター・カンパニー」芸術監督。2012年ロンドン・パラリンピック競技大会開会式の共同ディレクター、文化プログラム「Unlimited」のアーティストティック・アドバイザーを務めた。自身も聴覚障害を持つ。

## 劇場プロデュース作品を全国へ

この数年、文化庁や一般財団法人地域創造の助成、各地の劇場の協力を得て、自主制作事業のツアー公演も増えてきています。

とくに人気のあるものでは、親子向け作品として制作した『わかったさんのクッキー』（演出：岡田利規、2016年度制作）は10ヵ所以上、『ピノキオ』（演出：宮本亜門、2017年度制作）は12ヵ所ほど公演しています。2018年は、『不思議の国のアリス』（演出・振付：森山開次）を17ヵ所で公演予定です。2年計画で、1年目はKAATのみで公演、翌年にツアーに出すという形で実施しています。

ツアー先の決定プロセスでは、KAATの場合は、新年度前に企画書を全国へ300～400通ほど送るところから始まります。近年は実績もできてきて、毎年受け入れてくださる劇場も出てきました。そうした劇場とはどんな形で連携をすることが可能か、お互いに確認しながら進めています。

助成金も、複数館が連携することを推奨していることもあり、他劇場との恒常的な情報交換を心掛けています。隔月ペースで連絡を取り合うことも。2年先はどうなっているか、といった未来観測もしながら、事業の規模を決めていきます。

子ども向けの作品は、どの地域でも需要が高いです。できるだけ、いろんな地域をツアー先にして、新しい観客と出会いたいと思っています。

## ツアー公演をする意義

ツアー公演の意義といいますか、KAATの考えとしては大きく三つあります。一つは、公演回数を増やしたいということ。何度も上演を繰り返すことで、作品のクオリティは上がっていきます。なにより、横浜での集客には限界があります。感覚では、1万人ぐらい集客したら、もうそれ以上は回数を重ねても難しいです。たくさん観客に作品を観てもらうためにも、他劇場での公演をしていきたいと思っています。1作品につき、2万～2万5000人ぐらいには届けたいですね。二つ目は、最初からツアーを想定してネットワークを組めればツアー資金が確保できるので、作品を成立させるための保証にもなります。三つ目としては、情報をシェアすること。アーティストや演出家の多く、そして実演芸術に関するあらゆる情報も、やはり首都圏に集中しているという現状があります。KAATが得たこれらの人脈や情報を、地方の劇場と連携することでシェアしていく、横浜に位置する公共劇場としてそうした使命もあるのではないかと考えています。

また、作品そのものを提供してだけでなく、企画を提供するという試みも始めました。公演の企画のフォーマットだけを提供して、以降の実現に向けてのプロセスは各劇場が行うという形のもので、どこかでやられているプログラムをそのまま持ってくるのではなく、その劇場ならではの独自性を発揮できるように、そういうお手伝いをしていきたいとも思っています。

## ディスカッション

進行：岸 正人（(仮称)豊島区新ホール劇場開設準備室）



**岸** 前半は、芸術創造団体である日本フィルの山岸さん、公立劇場であるPLATの矢作さんとKAATの伊藤さんの3人に発表いただきましたが、地域性や設置目的がまったく違うなかで、それぞれに観客創出に向けた取組をされています。

観客創出といっても、単に売り上げを伸ばすということではなくて、新しい観客層にどうコミットしていくかというお話だと。とくに、日本フィルは新しい支援者・協力者として取り込んでいくという印象を受けました。

PLATは、地方都市でありながら積極的にツアー受け入れ先としてあられ多彩な演目を展開しているというのは、地域の人々にとっては非常に恵まれた環境だと思いました。

KAATは、さまざまなバリエーションの作品を自主制作で創作していて、全国展開することでより多くの観客に届けるという試みだと思います。

内閣府が実施している「文化に関する世論調査<sup>1)</sup>」では、過去1年間の鑑賞行動率が、映画は31.1%、音楽は24.8%、演劇は8.5%。現場の感覚としてはもう少し低い数字じゃないかという気もしますが、新しい観客創出に向けた取組は、これら行動率を上げることにつながるものと思います。

**山岸** よい作品を広めるためには、劇場同士の連携

が重要であるというのはその通りで、普段から努力をされているという印象を受けながらお話を伺いました。

オーケストラは実演団体ですが、やはり地方公演や夏休み子ども向けコンサート等、ツアー公演を行います。ツアー規模が大きいかほど多くの人たちに届けることができます。あるいは、主催者（劇場・音楽堂等）と協力することで、より効率的・効果的に実現できる可能性もありますね。

**矢作** バリアフリー公演や障害者の方々に向けた試みは、地方の公共劇場が単独でやるのは非常にハードルが高いという印象です。聴覚・視覚障害者のための事前舞台説明や字幕サービス等は、とくに首都圏の劇場では実践例がありますし、ツアー公演の際に作品とサービスも一緒に提供してもらえたら、地方劇場でも実施の可能性は広がるだろうと考えています。

ただ、各劇場の仕様も違いますし、実際に地域にニーズがどのくらいあるのかも正直よく分かりません。まだまだ手探りの状況ですから、公演にサービスを付けたからといって、必要としている人が劇場に足を運んでくれるのか疑問はあります。

しかし、障害者に対する何らかの支援が対象経費になる助成制度もありますし、公共劇場としては積極的

1) 内閣府が数年に一度実施している世論調査。話題にしたのは平成28年度調査結果に基づく数値。  
[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/bunka\\_yoronchosa.html](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/bunka_yoronchosa.html)

に取り組んでいきたいとは思いますが。地方在住の障害者の方々にも、劇場で鑑賞することができるんだという可能性に気付いてもらうことが、一つのステップだと考えています。

**伊藤** 観客創出といった時に、劇場は「数を増やす」という捉え方をしているのに対して、日本フィルは「観客の幅を広げる」というような観点だったように感じました。

KAATは作品創造がミッションの一つですので、やはり数を増やすということを目指してしまいがちです。障害者向けのワークショップ等、観客の幅を広げるという試みは始めたばかりです。まだ本格的には取り組んでいるとはいえ、今後の課題ですね。もし、KAATが創造する劇場として取り組むとしたら、障害者を表現者の側（創作側）に迎えられるかどうかという視点でやるべきではないかとは思いますが。

**岸** 日本フィルの『耳で聴かない音楽会』は二つの面で新たな取組ではないかと思えます。一つは、聴覚障害者の音楽へのアクセシビリティを広げたということ。もう一つは、クラウドファンディング等によって、障害の有無によらず芸術創造への支援者を得たこと。これまで舞台芸術への興味がなかった人や、障害者の周囲の人々に対しても、舞台芸術に親しむきっかけが提供できたのではないかと思います。

チケット販売も大変だったと伺いましたが。

**山岸** そうですね。『耳で聴かない音楽会』では、楽団のお客様対応も抜本的に変えなければなりません。日本フィルではもともと障害をお持ちの方もウェルカムという姿勢で、障害者手帳をお持ちの方の割引制度も導入していました。ただ、特別な扱いなので、インターネット上では販売せず、電話受付のみの対応だったんです。でも、聴覚障害の方は電話ができませんよね。

ですから、体制そのものを見直す必要がありました。具体的には、日本財団電話リレーサービス<sup>2)</sup>を紹介したり、インターネット上での販売の仕方もこの公演に関しては全部変えました。当日の観客の迎え方も。オーケストラの公演としては小規模の室内楽公演



でしたが、事務局がかけた時間と労力は相当なものでした。

劇場の方々からもアドバイスをいただいたり、TAnetの研修を受けたりもしましたが、こうした作業を通じて、私たちが知らず知らずのうちに作ってしまっていた壁に気付きました。チケット購入にしても、当日ロビーで出迎えるスタッフも、もしかしたら漫然と観客を迎えていたのかと。そして、実はほんの小さなことで、新たな観客を迎えられる可能性がたくさんあるんだろうということにも気付いたんです。

「障害はコストである」という言葉を耳にしたことがあります。そのコストを誰が負担するかという問題ですよね。負担すべきは当事者だけではないことを痛烈に感じました。

しかし、日本フィルが全てのコストを負担できるわけではないので、まずはコストをみんなでシェアすることが必要になります。そこで連携ということが大事になってくると思うのですが、プロボノ<sup>3)</sup>やボランティアなど、金銭ではない形の解決方法もあります。とくに地域との密接な関係がある団体であれば、地域に解決の種があるんじゃないかと思えます。

**岸** 足を運んでもらうために、当然のようにポスターやチラシを作り、チケットを販売していますが、そのやり方では情報を届けられていない人々がたくさんいるのではないのでしょうか。

フロアの参加者からもご意見や質問などいただいた

らと思いがいかでしょうか。

**参加者C** 観客を広げる工夫ということで、年に一度実施している能公演があります。刀鍛冶が出てくる演目で、人気のオンラインゲームとのコラボレーションをした例をご紹介します。ゲームキャラクターを使用して、twitterでの広報やパンフレットを作成しました。ゲーム会社のtwitterアカウントでも拡散していただいたところ、瞬間的に200枚ほどチケットが売れ、最終的には一週間以内に700枚のチケットが完売しました。

コラボ企画によって、新しい観客が増えた事例です。これまでの能公演はシニア層が中心でしたが、これ以降は若い女性の層が増えました。

**岸** ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

**参加者D** 当館でも、プロの俳優・スタッフが1ヶ月半の滞在制作をするプログラムがあります。ツアー公演も行います。

テレビでも見たことがある俳優が長期滞在すること自体、地方にとっては大事件です。地元の飲み屋で出会わせた市民がチケットを買ってくれたりします。それから、市民サポーターという形で、プロの創作現場を市民が支えるという珍しい仕組みをつくっています。市民ボランティアの方々が、腕をふるって稽古場のケータリングを用意してくれたり、市民と俳優が交流するんですね。

その結果、通常だと400～500人ぐらいの集客なのですが、このプロジェクトに関しては1000～1500人集客します。プロが地域に滞在しながら、市民と一緒に作品をつくっていくという方法もあるということです。

それから、社会的課題に対するアプローチの一つとして、経済的状况から劇場に来ることが難しい家庭に対して、自治体と連携しながら、企業からの協賛金を募り、チケットをプレゼントするという試みもしています。対象となったお客様には感想を手紙にさせていただいて、協賛企業にお渡ししています。

**参加者E** 昨今、オーケストラはどれも財政状況が非常に厳しく、とくに企業からの協賛金が得にくいという状況を耳にします。日本フィルではこうした取組によって、協賛は増えたのか、手ごたえをお聞かせください。

**岸** パンフレットでは、個人や企業の支援者の名前

がびっしりと並んでいますね。

**山岸** 日本フィルの年間事業予算は約14億円、うち1億円ほどが企業からの寄付等で、法人会員として少しずつ支援をいただいています。これが増えているかという、率直に言って減少傾向にあります。「オーケストラはお金がかかるので、質の高い芸術の維持のためにご支援ください」というスキームでは、もはや新たな支援は得にくいのが実情かと思えます。

しかし、我々の取組に対して応援しようという流れはあります。一つひとつの企業との付き合いのなかで新たな事業が生まれることも。例えば、寄付や協賛という形ではなく、自分たちが望む地域貢献のために企業が主催となり、日本フィルへ公演を委託するという形もその一つです。

個人からの支援も、定期会員という形もまだ多いですが、今回のクラウドファンディングのように「こういうことをやるなら応援しよう」という支援もあります。我々からの訴え方も時には変化しなければならないのだということです。

ただ、これは大事なことですが、我々は「社会的活動をするから応援してください」という団体ではありません。芸術創造団体ですので、本質的な活動を理解していただいた上で、何か一緒にできるだろうか考える、丁寧なやり取りによる支援の広がりが多いかと思えます。

**参加者F** 長年にわたり公共劇場に携わってきましたが、ハンディのある方々が劇場へ足を運ぶことが大規模都市ほど難しいと感じていました。地方劇場に携わるようになった時に、劇場職員と勉強会を始め、手話を覚えることにしました。しかし、なかなか困難。手話だけでなく盲導犬や心臓マッサージ等、多くの対応を一括りに考えてやろうとしていたので、職員の自主的な研修だけでは身に付かない状況でした。

本気であらゆる人々を迎えようとするならば、きちんと劇場として予算を確保し、定期的な研修が必要だと感じました。館長や設置主体である自治体がバックアップすることが必要だと、自分の経験からも思います。

**岸** 実演芸術分野の我々は、福祉の専門家ではありませんので、外部の専門組織との連携、そのための予算確保を考えていかなければならない、自治体と

2) 通訳オペレーターが、聴覚障害者との手話・文字（ビデオ通話等を使用）を通訳し、電話先へ音声で伝えるサービス。  
<https://trs-nippon.jp/>

3) 各分野の専門家が、職業上持っている知識・スキルや経験を活かして社会貢献するボランティア活動。近年、芸術分野においても人的支援の一つとして注目を集めている。

も協議していかなければならない。そうでないと現場が疲弊してしまう恐れがあります。

**参加者G** 地域の独自性を出していくことが重要だと思いますが、地方での公演は1～2回というのが現状です。そのなかで、連携のあり様として、地域の独自性が実現できるのでしょうか。

**伊藤** KAATの実績から紹介すると、例えば2014年度の『KAAT the ツアー』は、劇場を主役としたイベントというコンセプトで企画したものです。謎解き形式で、観客が劇場内を自由に歩き回り、結果的にバックステージツアーになっているという形にしました。遊びを通して、劇場の特徴を観客に発見してもらうのです。これは、キャストを置かず、劇場の制作・技術スタッフで実施しましたが、とても満足いただきました。この形式ならば他劇場でもできるのではと、基本的なルートや方法をパッケージ化して、企画書を全国に送りました。経済的に厳しい地方劇場でも自分たちならではの作品ができるということで、好評を得ました。KAATから制作2名と技術者2名が企画構成の初めだけ一緒に考え、あとは各劇場で練ってくださいと。

こうした経験を積むと、作品をつくる喜びが劇場職員に根づくと思います。作品をつくるノウハウを提供する、共同でつくるという形態には、公共劇場のネットワークの可能性を感じます。

**参加者H** 音楽アウトリーチ事業を実施しているのですが、先日初めて難聴者の参加がありました。完全に聞こえないわけではなかったのですがそのまま実習を行いました。後から考えると、何かやれることがあったのではないかと考えています。

今日は聴覚、視覚など身体的な障害に対する取組のお話でしたが、知的障害や自閉症に対しては、何か取組事例があるのでしょうか。

**山岸** 完全に聞こえない方は、聴覚障害者のなかでも極わずかで、一人ひとりに必要なサポートが異なるというのが、一番の難しさです。何ができるだろうか、と考え悩むよりも、直接お尋ねすればいいと思います。想像しても解決しないので、その人がどんなサポートを必要としているのかを聞くことです。サポートできる、できない、という線引きをはっきりするしかないのかなと思います。私たちが尋ねるべきは「どんな障害か」ではなく「何が必要か」だと思います。

**岸** フロアに、自閉症や知的障害に対する取組事例がある方はいるでしょうか？

**参加者D** フランチャイズを結んでいる芸術団体と協働して行うプログラムの一つに、客席で声をあげても何をしてもいいというコンセプトの公演があり、知的障害の施設の方々へも声がけをしています。毎回600人ほど、障害者施設の方々、乳幼児連れの親子等、なかなか劇場に来られない人たちの来場があります。

他にも、イギリスの劇場のプログラムからヒントを得て、障害者と一緒に参加するダンスプログラムもあります。知的障害というのは、家や施設に閉じこもって生活するケースが多く、外で楽しむという機会がほとんどないのが現状のようです。障害者施設の一つひとつ回って内容を説明して、2016年に初めて実施して、付き添い人や障害のない人も含めて130人ほどが参加しました。一緒に踊るという体験を通して、その場があたたかい雰囲気になりました。接する機会がないから何となく持っていた偏見が少しでも軽減されるような、いい空間ができたと思います。

**参加者I** 我々は2016年頃から、障害の有無に関わらず皆が集える場所を目指して、プロジェクトチームを作っています。

これとはまた別ですが、アーティストが始めたプログラムで、自閉症の子どもを持つ親御さんのためのコンサートがあります。障害のある方のケアをしている人をケアするという、珍しい試みだと思います。ご参考になれば。

**岸** ありがとうございます。では、最後にお一人ずつコメントをお願いします。

**山岸** 日本フィルの組織自体がドラスティックに変わることはないし、できません。内部的問題や資金問題もあるので、やりたいことが全てできるわけではなく、もどかしさはあります。でも、一回やれたら二回目はできるんです。そして、二回目をやるのが日本フィルだけでなくとも良いと私は思っています。

障害者に向けた取組、日本フィルにとって通常活動であり、今日お話した取組がたまたま少し特別な取組だったに過ぎません。こうした取組を、いろいろな方々と一緒にできるのが我々の願いです。我々も頑張りますし、この事例から関心が向いて皆さんの何かきっかけになればいいなと思います。

**岸** PLATは非常に多彩なプログラムを実施していますが、自治体からの評価や地域の反応などはいかがですか？

**矢作** これだけの多様な作品が豊橋で観られるとは誰も予想していなかったことです。劇場の設置者である自治体は想定していたと思いますが、観客である市民は「豊橋なんて」というネガティブマインドだったと思います。

しかし劇場をつくって、プロのスタッフが入り、公演を呼び込むことによって、さまざまな劇団や俳優、スタッフが豊橋に来るようになりました。彼らが劇場を気に入って、食べ物が美味しかった、良い街だとか言ってくると、ここで生活している人たちにとっては大きな誇りです。そうしたマインドを獲得できるようになったと思います。

公共劇場は、単に作品を上演するだけの場所ではなく、10年、20年先にこの地域を支える人を育てるという役割も担わなければならないでしょう。若い頃にこの劇場でいい体験をした、劇場にはある力があり、そこに予算を遣うべきだというマインドを持つ人が、10年後20年後に市役所の中核に在ることを期待しながら、コツコツやっています。

首都圏は人口が多いですが、そこからわざわざ豊橋に来て何かしてくれることを期待はできません。でも一度は外へ出ても、戻ってきた時に、自分が育った街を自分たちが支えるんだというマインドを持った人間を、どれだけこの劇場で生み出せるか。劇場は、そういう未来も考えてやっていく必要があると思っています。

**岸** KAATでは、自治体からの評価、あるいは内部評価はいかがですか。

**伊藤** 先ほどの山岸さんの言葉、観客創造とか、幅を広げるとか、方法はいろいろあるでしょうけど、日本フィルは障害を持った観客のためではなく元々の団体の活動ミッションからやっているんだということ。やはり目的を見失っては駄目だと思いました。

というのも、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、行政から補助金が出やすい。これを起点にして事業企画が始まることもあると思いますが、目的を見失わないよう、10年続けられるような考えを持って取り組まなければいけないと思いました。

それから地域の独自性ということで補足しますと、KAATからも一生懸命に企画書等で発信をしています

が、長い時間をかけて仲良くなっていかないとなかなか実現は難しいです。しかし逆に、KAATへ企画を持ちかけてもらうこともあっていいんじゃないかと思います。その地域でやりたいことがあって、自分たちだけでは難しいけれど、KAATと連携すれば実現するという。そうした企画もKAATが中心になって創作し、地方に回していくような形もあり得るのかなと。事業費の面でも相談しながら企画を持ちかけてもらえば、より良い連携が考えられるんじゃないかと思います。

**岸** フロアの皆さんもそれぞれ、本日の事例を参考にしながら、このフォーラムを通して引き続き情報交換、交流を深めていただければと思います。ありがとうございました。